

30年後、50年後も元気な綾部市であり続けるために ～綾部市の移住・定住促進事業について考える～

京都府綾部市 後藤 裕美



1. はじめに

私は隣の福知山市のまちなかで生まれ、長男である父親が実家の後を継ぐために綾部市へ戻ったため、4歳から高校を卒業するまで綾部市で育った。住んでいたのは市内でも人口減少が進む上林地域で、小・中学校は1クラスしかなく、物心ついた時からほとんど同じメンバーと共に中学を卒業するまで過ごしてきた。

今では、私が通っていた保育園、小学校、中学校はどれも子どもの減少に伴い廃園や統廃合されたことにより、名称や校歌も変わり、建物も建て直され、昔の面影が無くなっている。また、統廃合されたことにより、スクールバス通学となり、現在は昔のように小学生たちが歩いて学校へ通う姿が見られないようになっている地域もある。

綾部市は高校が1校のみで、その先の高等教育機関が市内にはなく、多くの高校生が卒業後に住み慣れたふるさとを離れ都市部へ進学する。広い世界を見て、触れて、体験することは、自身の大きな財産になる。自分の子どもにも、一度は生まれ育った地域を飛び出して外の世界でたくさんの経験を積んで欲しいと願っている。

ある方が、自分の子どもが将来ふるさとに帰りたいと思った時に、元氣なふるさとであり続けるため、自分たちはこのまちを守り続ける、と語っていたのがとても印象に残っている。行政職員である以前に、綾部市民の一人として、子どもたちのために30年後、50年後の未来も綾部市が元氣なまちであり続けるために、自分には何ができるのだろうと改めて感じた瞬間である。

私の前配属先は図書館で、地域の将来を担う子どもたちを育てるため児童サービスに力を入れていた。現在は、定住・地域政策課で、人口減少が進む中、地域コミュニティの維持や地域の活性化を図るため、移住・定住の促進業務にあたっている。どちらも、綾部市の未来のため、新たな担い手を増やすというミッションに取り組んでいると言える。

このレポートでは、これまでの綾部市の移住・定住の取り組みの成果を明らかにし、現状の課題は何か、その課題を解消するため何ができるのかを考えていきたいと思う。

2. 綾部市の概要

綾部市は京都府の中央北寄りに位置する人口3万人あまり、市の面積の約77%が森林という自然豊かな田園都市。「水源の里」と名付けた美しい自然や豊かな里山が広がる集落がある。その一方で、中心には公共施設や大型スーパー等が集まるにぎやかな市街地があり、舞鶴若狭自動車道、京都縦貫自動車道が接続し、京阪神地域と日本海地域をつなぐ交通の要衝地でもある。また、ものづくりを中心とする多様な産業が、繊維メーカーのグンゼ株

式会社や日東精工株式会社を代表として集積し、農業でも、綾部市は「宇治茶」のブランドを支える茶の名産地であり、また、米作も盛んで、綾部のコシヒカリは、京都府が主催する「京のプレミアム米コンテスト」において、最高金賞を受賞するなど評価が高い。

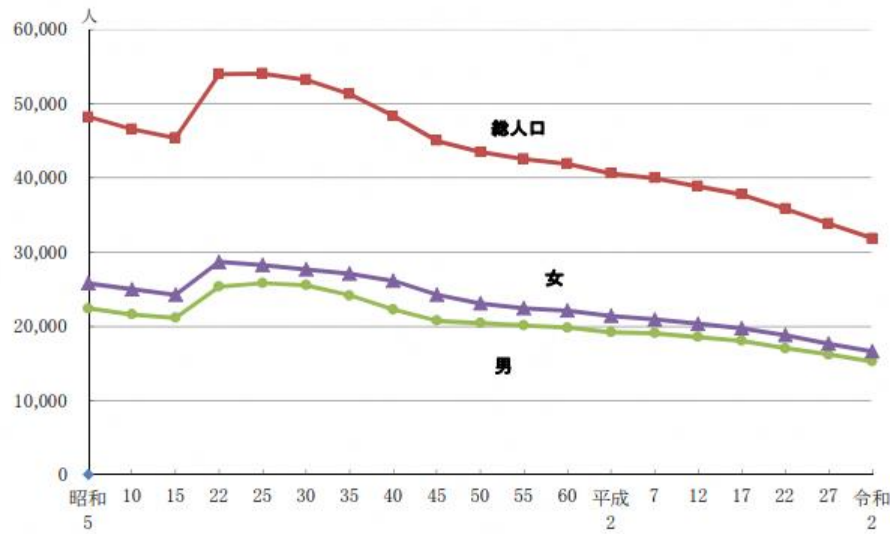
また、老舗の繊維メーカー「郡是」の創業や「大本」の開教、日本で初めての「世界連邦都市宣言」等に見られる進取の気質、営々と受け継がれてきた地域の伝統行事など、多くの有形、無形の歴史的・文化的資産を有している。特に、無形文化財に指定されている黒谷和紙は、平家落人 800 年の歴史をもち、丈夫で強く、長持ちする特徴から、長く暮らしの中で利用され、市内の小学 6 年生は、自分たちで手漉きの卒業証書を作ることが伝統となっている。

このように、地方小都市ながらさまざまな機能や特性がバランスよく備わっている、快適性と利便性を併せ持つまちである。

3. 市の移住・定住施策の経過

綾部市の人口は、昭和 25 年の 54,055 人から減少し、令和 6 年 12 月 1 日現在においては 30,072 人と、3 万人をきることが目前に迫る状況となり、人口減少に歯止めをかけるため、全国に先駆けて、以下のような移住・定住の取り組みを積極的に行ってきた。

図 1 綾部市人口の推移



「綾部市の人口（令和 2 年国勢調査結果報告書）」より

平成 12 年度	「里山ねっと・あやべ」開設 廃校を活用した都市交流拠点施設。令和 5 年 5 月にリニューアルオープンし、コワーキング施設を充実、交流人口の拡大に向けて田舎暮らしの魅力を伝える講座を展開
平成 18 年度	「綾部市水源の里条例」制定

	存続が危ぶまれる集落を消滅させまいとの想いで始まり、「限界集落」をその多くが由良川上流・支流域に存在することから、将来への希望を込めて「水源の里」と称し、その再生策を全国初の条例化
平成 19 年度	「全国水源の里連絡協議会」立ち上げ
平成 20 年度	企画部企画広報課に定住サポート総合窓口を設置し、空き家バンク、定住希望者の相談活動を開始
平成 22 年度	定住促進課を設置し、定住サポート窓口を所管
平成 23 年度	「交流から定住へ。定住から地域振興へ」を目的に、観光交流課（交流）、定住促進課（定住）、水源の里・地域振興課（地域振興）を配した定住交流部を設置
平成 26 年度	「綾部市住みたくなるまち定住促進条例」制定 定住促進について、市・市民・事業者が役割を明確化し全市一丸となって取り組む機運醸成を図る理念条例

4. 現在取り組む移住・定住施策

第6次綾部市総合計画（令和3年度から令和12年度）では、田園回帰の流れを追い風に、“一人ひとりの幸せをみんなで紡いで実現できるまち…綾部”を目指し、関係人口の更なる拡大や移住・定住施策のより一層の推進、若い世代が安心して子育てできる環境整備等により、人口減少を抑制し、ふるさと綾部を未来に繋いでいくことを掲げている。

その中で、定住・地域政策課は、「定住促進担当」と、水源の里集落に関する事業、コミュニティナース事業、特定地域づくり共同組合に関する業務等を行う「水源の里・地域振興担当」の二本柱で構成されている。

定住促進担当では、以下のような定住促進事業を行っており、空き家バンク事業をはじめ、移住・定住支援のワンストップ窓口として活動している。

○「移住立国あやべホームページ」の立ち上げ：「移住立国」をキーワードに、移住を促し綾部市を元気にするプロジェクトとして、市内12地区の魅力を紹介する地域紹介動画や、先輩移住者に焦点を当てた「移住者紹介動画」を配信するなど、移住後の生活がよりイメージできるよう情報発信を行っている。

○京都市中京区の「京都ペレット町家ヒノコ」内にあやべ定住サポート京都サテライト店を設置：都市部の移住検討者に対してのアプローチとして、相談窓口を開設。月に一度市職員が出向いて出張相談を開催するのに併せ、綾部の特産品などを販売する「あやべ市（いち）」を開催している。

○「中学生みらい会議」を実施：市内6中学校の2年生を対象に、移住者の話を聞いて綾部市の良さを知るとともに、他の学校との交流を通じてつながりを持ち、その取り組みの様子を撮影、編集した動画を二十歳のつどいに見ることで綾部市へのUターンの促進につなげる。

○イベント「あやべ3040成人式」を開催：30歳、40歳の綾部市出身者、在住・在勤、在住歴、在学歴の方を対象に同級生との絆を深めるとともに、ふるさとの良さを再確認してもらい、参加者をUターンに結びつける。

○空き家バンクの登録を促進する取り組み：

・地元自治会を通じて空き家実態調査を行い、空き家所有者にアンケートを実施：その後市内の宅建業者と連携してアプローチを行った結果、2年間で新たに8件掘り起こす。

・「空き家対策啓発動画」の配信：空き家を放置することの危険性や、空き家の利活用により移住者が増え、地域が元気になることを周知し、空き家バンクへの登録促進を図る。地域紙あやべ市民新聞に掲載されている4コマ漫画「となりのしかたさん」が登場することで、空き家の深刻な問題をより身近に感じ、小学生からでも気軽に見てもらえる動画に仕上げている。

・「空き家物件の仲介制度」：空き家バンク事業における空き家の売買や賃貸借における契約後のトラブルを未然に回避するため、綾部商工会議所に所属する市内宅地建物取引事業者と連携する。

○「UIターナー者定住支援住宅」を設置：資金力が弱く、離職して移住するケースの多い若い世代の定住を促進するため、市が空き家所有者から10年間無償で住宅を借り受け、水洗化等、生活可能なレベルに改修を行った後に定住希望者へ貸し出す。これまで10棟整備し、平成23年の設置以降25世帯が入居、うち19世帯が綾部市への定住につながっている。

○ボランティア組織「ここらへんのことつたえ隊」：地域のこと、暮らしのことや移住希望者が抱えている疑問などを気軽に相談できる先輩移住者などで構成された組織がある。

○ジョブアドバイザー：連携している綾部市内のインターンの受け入れ企業とインターンを希望する移住希望者とマッチングする。

5. 移住・定住施策の実績と成果

このように、地道に行ってきた移住・定住の取り組みにより、定住実績は増えている。

定住サポート総合窓口による定住実績は、データがある平成20年度の16世帯49人から、以降増減を繰り返しつつも、世帯数は令和4年度に39世帯と最高となり、定住人数では令和5年の82人が過去最高の実績となった。現在、コロナ過を経て働き方や生活スタイルが変化したことや、コロナ過で人口が集中する都市部での暮らしにくさを感じた人が、移住を考えるきっかけになったという声が増えている。

空き家についても、令和4年度から空き家の掘り起こしに対する取り組みに注力し、令和6年12月現在で93件と、この数年でバンク登録物件数が増加している。地域で空き家の活用について考える会を立ち上げたり、市の担当者に出前講座を依頼して学ぶ場を持ったりするなど、地域住民が積極的に移住促進に向けて動く場面が増え、地域での活動も力になっていると感じている。

定住サポートの窓口に、近所の空き家所有者に声をかけたいから資料を欲しい、という問い合わせや、地域の人にバンク登録を勧められたと言って窓口相談に来る空き家所有者も増えている。その際、市の窓口なら地域へのつながりなどがあり安心だから空き家バンクへ登録してほしい、と地域から声掛けがあったという声もある。

行政が行っている取り組みが、地域住民にも一定の評価を受けていること、また、地域住民自身が自分の住んでいる地域を何とかしたいという思いが現れていると感じる。

6. 移住者の声

綾部市への移住者がどんなことを求めて移住したのか、また、どのように移住に至ったかなどを知るために、先輩移住者の声を集めた。

① 京都市内から移住したKさん夫妻

夫婦ともにパソコンがあれば場所を選ばない仕事に就いていたため、好きな場所で暮らすのはどうかと考えたときに、以前京都府北部へドライブに出かけた際、穏やかな空気感に惹かれた綾部市を思いだした。そこで、綾部市の農村部、市街地、水源の里とドライブに出かけ、本格的に綾部市への移住を考え始めた。

受け皿はどうかと考え情報を集めるうえで、移住立国あやべホームページから物件やイベント情報を知り、京都サテライト店の出張相談に訪れた。外部に向けてイベントや移住者向けの取り組みは、移住を考えアンテナを張っている人々にとってもありがたく、他の自治体と比べ、綾部市の情報発信は「外部に対して開かれた地域」「受け入れてくれる地域である」という印象を強く与えてくれるものだった。

また、移住を考えると、人とのつながりやコミュニティの存在がとても重要な要素になったという。

② 神奈川県から移住したYさん夫妻

もともと関西に魅力を感じていて、有楽町の「ふるさと回帰支援センター」で移住相談して綾部市を知った。何度か綾部市を訪れるうちに先輩移住者などと次々と知り合うことになり、綾部市への移住に心が傾いていった。まずは綾部市街地に入居できる賃貸アパートで移住生活を始め、目の前にある畑を借りて野菜づくりを始め、そこを拠点に農村地域に定住先を見つけた。綾部市に来てから気づくことが多く、しばらくアパート暮らしをして綾部の事情が分かってから古民家を購入したのはとても良い展開だったと感じているという。

③ 神奈川県から移住したSさん

自然の少ない都会生活にうんざりしていたSさんは若いころから田舎暮らしをしたいと、40代で「10年以内に会社を辞める」と心の中で決めた。会社を辞めたあとに料理修行を経て、自宅に友人や知人を招いて食事会など楽しんでいたが、田舎暮らしへの思いは消えていなかった。そんな折、コロナ過に巻き込まれ移住への動きが加速した。いくつかの候補地を見て回るなか、どうもピンとこず、「呼ばれている」感じがしなかった。綾部市の「移住立国あやべ」ホームページを見て、移住を歓迎していることが伝わってきた。

何度か綾部市を訪れ、農家民宿に泊まるうちにたくさんの人と出会い、家と出会い、それらすべて「出会うべくして出会った」と感じた。そして、「綾部しかない」と確信した。

7. 水源の里・瀬尾谷における移住者受け入れの実態

地域住民が積極的に空き家バンクへの登録を所有者に呼びかけ、それが新たな移住者を迎えている瀬尾谷集落について紹介する。三方を山に囲まれ、街道筋からも離れ、家屋も少なく田畑が多く、とても静かな環境の瀬尾谷集落。綾部市東部を貫いている上林川が集落の入口に流れており、かつてはウナギやアユ、天然記念物のオオサンショウウオも見られた。農業は黒瓜、お米などを栽培しており、その黒瓜を使い、独自の製法で粕漬けの生産を地元住民が協力して行う「瀬尾谷粕漬」を特産品として売り出している。

瀬尾谷集落は、令和6年4月現在で高齢化率63.6%と、綾部市内で古屋集落に次いで2番目に過疎高齢化が進む水源の里だが、住民同士の距離が近く仲がよい。飲みの集まりなど、昔は女性の参加が少なかったというが、今では女性もみんな参加し、集まりの時には必ず戸主だけではなく、世帯全員が参加するようにしているという。

また、早い段階から綾部市の市街地にも拠点を持つ他出者が、自治会の役を担うことで自治会活動を維持し、地域コミュニティを維持し続けている。30年ほど前、住民の高齢化が進み自治会長のなり手がないうち、当時集落の外へ出ていた若い世代の二人が、2年交代で8年間自治会長を務めた。今でも、住まいは市街地にあるものの、田畑の耕作や自治会活動に積極的に関わって地域を盛り上げている。

この集落では2年ほど前、市の空き家バンクに登録された空き家に、定住サポート窓口を通じて移住者が初めて入ってきた。この2年で新たな移住者が増え、令和4年に5世帯9人だった人口が、令和6年で7世帯11人に増えた。最近では外から移住してきた若い世代も、積極的に集まりや地域の行事に参加してくれるため、高齢の地域住民と交流ができています。

瀬尾谷では、以前から京都府とタイアップして都市交流事業に取り組むなど、積極的に外から人を呼び込む活動を行ってきた。そのため、初めて移住者が入ってきたときには、それほど抵抗はなかった。また、空き家バンクは、地域の住民が積極的に空き家所有者に声掛けを行って登録につながり、それが新たな移住者を誘致する結果となった。

瀬尾谷集落では、黒瓜を栽培し「瀬尾谷の粕漬け」を生産しているが、瓜の栽培を、移住してきた人も新たに畑が割り当てられ、積極的に栽培に励み、粕漬け事業の新たな担い手となっている。新しい移住者が自分たちとは違う農法で畑を始めた時は、何をしているんだろうと不思議な思いもあったが、付き合っていくうちに、そういうやり方もあるんだと理解できたという。

その他にも、2年ほど前に京都産業大学の学生と連携し、水源の里の魅力を新たなカタチでPRする「水源の里 A to Z」という冊子を制作した。学生がフィールドワークとして地域に入り、住民から聞き取りを行うなど1年間を通して交流をしながら作成する取り組みである。その時に参加した大学生の兄が、瀬尾谷集落を気に入って、たびたび集落に遊び

に来るようになり、現在、地域振興を目的とする綾部市のボランティア団体を立ち上げている。団体では、農業を通して都会に住む若者と田舎をつなげるきっかけを作ろうと、これまで、ピザを焼いたり、お餅つきをしたり、今年度は養蜂に挑戦した。若者の農への関心を具体化できる挑戦の場として休耕地活用を目指し、地域住民も、さて次は何をしようかと一緒に楽しく学生と関わっているという。

瀬尾谷集落の例から、早くから集落の存続について危機意識を持って、積極的に外部から来る人との関わりを持って活動を継続してきた成果が、集落の地域コミュニティの維持や、関係人口、新たな移住者の誘致につながっているのではないだろうか。

8. 移住・定住施策における課題

その一方で、移住・定住施策には、以下のような課題も残っている。

① 空き家バンク登録物件の少なさ

まだ定住希望者に対して空き家バンクの物件情報が足りていないのが現状である。令和4年度の空き家調査の結果によると、空き家は市内全域に1,145件、農村地域で約800件弱あるのに対して、空き家バンクホームページに掲載されている物件数は90件前後となっている。「ここらへんのことつたえ隊」地域リーダーからも、空き家バンク事業のことを今まで知らなかった人や、自分の所有している空き家が利活用できる意識がない所有者が結構いる、という声が聞かれている。

② 移住者への地域情報の不足

定住希望者へのアンケートにおいて、移住の際に不安に思っている点について、「地域とのコミュニケーションについて」が多かった。移住者Kさんは、移住を経験した人や移住を考えている人の声もたくさん聞くというが、農村の暮らしが具体的にイメージできない、離職して移住をしなければいけないため、仕事の面での不安、それに伴い金銭的な不安もあり、そういった支援制度の情報が事前につかめなかったという声もあるという。

他方で、地域住民から、自治会活動など集落の付き合いや草刈りのことなどを地域に入るまで知らない移住者がいる、地域に入る前にきちんと必要な情報を伝えてもらわないと困る、といった声も聞かれる。綾部市は中山間地域という地域がら、空き家バンクでも農地付きの物件が多く、農地の売買については、農地法の制限を受け、農業従事者でない権利の取得ができないため、事前に十分な理解が必要である。

現在、定住サポートの窓口では、空き家バンクの物件情報を提供する際には、必ず自治会加入を条件としており、物件の交渉申込が出た段階で、地元自治会長との顔合わせを行い、自治会費や自治会活動について知ってもらう機会を設けているが、まだ事前の情報が足りていない部分があると感じる。

また、近年日本以外に在住している外国人から移住立国あやべホームページなど、ウェブサイトを通じて問い合わせが増えている。契約手続きの複雑さや言語の違いによるコミュニケーションの問題もあるが、それ以上に、地域コミュニティ維持のために自治会に加入し、地域活動にも積極的に参加してもらうという説明が難しいと感じている。

9. 移住・定住施策の取組事例—山口県周防大島町

綾部市が課題としている移住者への地域情報の不足について、先駆的地域づくり現地調査で訪れた山口県周防大島町の事例を分析した。周防大島町では、離島という不利な状況にありながら、平成24年から令和4年までの10年間で200人以上の移住実績があるなど、移住者の誘致に成功し、情報発信にも力を入れている。

周防大島町では、移住希望者を対象とした島暮らしを体験する1泊2日の「島時々半島ツアー（お試し暮らしツアー）」を行っていた。ツアーの内容は、マイクロバスに乗って島を巡るものだが、観光は行わず、町内、町外を含め、生活する際に利用する公共施設やスーパー、医療機関などを見てまわる。離島という地域がら、生活するうえで町内だけでは足りない部分もあるため、町外のホームセンターなども紹介する。医療機関では、ドクターから直接話を聞き、参加者からの質問にドクター本人が直接答えるという場面もある。

ツアーの参加者に事前にアンケートを取り、農業への関心が多ければ農業関係のキーパーソンとなる人へ会いに行くなど、アンケートの内容に応じて複数の場所や地域の人に出会う場を設定している。参加者のニーズに応じて、地域の人の生の声を聞けるため、より地域に密接した情報を収集でき、島暮らしのイメージが具体化している。また、ファイナンシャルプランナーの資格を持つ先輩移住者が、島での生活を送るにあたって目に見えない資金計画や、冠婚葬祭費、町内会費等を知ってもらうための話をする。夜には懇親会があり、地域住民と一緒に食事交流することで、気軽に話ができ、地域住民だけではなく参加者同士も仲良くなる。

また、ツアーの様子を撮影、編集した動画を配信し、新たな参加者を誘致するうえで効果的に発信している。

これまでこのツアーに参加した累計約200人のうち、3割が定住につながり、そのなかで、新たなガイドが誕生し、より移住者目線のナビゲートができる良い循環になっている。

このツアーを通してさまざまな人と知り合って話ができたとする参加者の感想からも、地域のことを知るときに、立地や交通、医療機関や買い物ができる施設など物理的な環境はもちろん、地域に住む人を知ること、移住後の生活をより具体的にイメージするだけでなく、安心感にもつながると感じた。

周防大島町の移住担当者は、移住希望者にはいいところだけを伝えるのではなく、悪いところを伝えることが大きいと話してくれた。そこから移住すると地域に入ってからマイナスに感じるのが少ないという。

10. これからの移住・定住施策の提案—農家民宿と連携した地域情報の発信

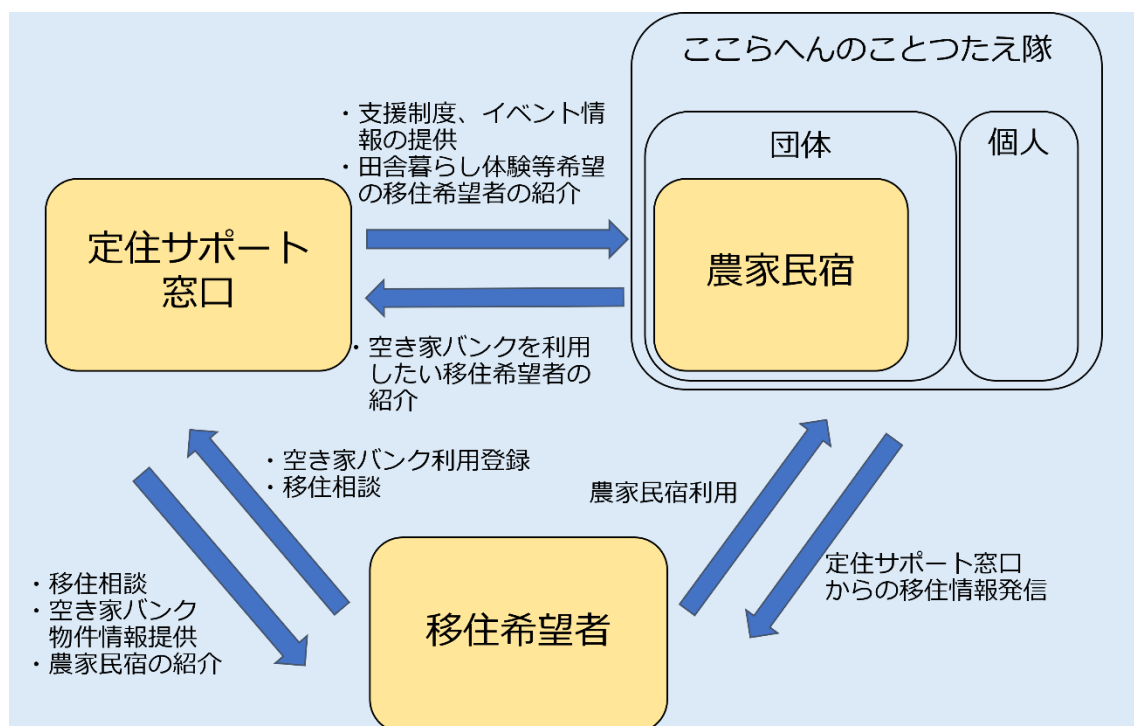
綾部市の移住者が直面している、住んで分かる地域の情報への理解という課題に対して、周防大島町での取り組みから、実際に現地に足を運んでもらい、自分の目で見て、触

れて、体験してもらうことが地域を知る一番の近道であり、知りたい情報を的確に拾う手段が必要だと考える。

そこで、市内に数多く存在する農家民宿と定住サポート窓口が連携協力し、移住者に対して有益な情報を共有し、定住サポート窓口につなげる協力体制を作ることを提案する。

農家民宿のオーナーのほとんどが市外から移住してきた先輩移住者である。それぞれ、地域の特性やオーナー自身のスキルを活かした体験プログラムなどを行っている。周辺の農家民宿が連携して、「散策マップ」の制作や、様々な体験でお得に泊まれるキャンペーン、また、子どもたちへの農作業体験を通して自然の中で生きる力を育み、里山の風景や田を守るプロジェクトを実施するなど、その活動は多岐にわたる。英語など、外国人対応が可能な農家民宿も多い。綾部市の田舎暮らしの体験はもとより、地元住民ならではのコアな情報を発信して、移住者目線でプラスの面、マイナスの面をリアルに伝えてくれるだろう。

図2 農家民宿と連携した地域情報の発信のしくみ



現在市内に約20件ある農家民宿に、「ここらへんのことつたえ隊」に登録してもらい、その隊員に向けて、市の定住サポート窓口から、移住者への支援制度やイベント情報などを随時発信する。農家民宿では、移住者に対する市の情報を移住希望者に対して伝えてもらい、移住の問い合わせや相談があった際には、定住サポートの窓口へつないでもらう。また、定住サポートの窓口での相談でも、地元の人話が聞きたい、先輩移住者につないでほしい、田舎暮らしの体験をしたいといった声が移住希望者から寄せられた場合に、希望地域の農家民宿につなぎ、そこで農業体験や地元住民との交流などを通して、地域のことを知り、地域の人とのつながりを作ることで、綾部市への定住につなげることができる。

と考える。

おわりに

このレポートを作成するにあたり、綾部市の移住・定住の取り組みについてひとつずつ内容と成果を洗い出す作業を行った。その結果、少しずつではあるが、それぞれ確実に成果として現れていると実感した。また、地域住民自身が集落を消滅させてはいけない、これまで維持してきた地域コミュニティを守りたいという強い思いを持ち、積極的に地域づくりに取り組んでいる姿勢を改めて感じた。移住者によって外部の視点を取り入れることも重要であるが、受け入れ側の地域にも目を向け、地域の思いや意見を吸い上げることも必要だと感じた。地域を巻き込み、今ある地域の資源を活かしたまちづくりについて今後でも取り組んでいきたい。

【参考文献】

- ・綾部市「綾部市市勢要覧」
- ・綾部市「令和4年版あやべ統計書」
- ・綾部市定住交流部定住地域・政策課「綾部市の定住促進施策の概要」
- ・移住立国あやべホームページ <https://ijurikkoku.com/>
- ・綾部市「綾部市で叶える、ほどよい田舎暮らし 綾部で暮らす」
- ・綾部市「水源の里のあゆみ」
- ・あやべ水源の里連絡協議会ホームページ <https://suigen-ayabe.com/>
- ・スオウオオシマドットコム <https://www.suouoshima.com/about.html>
- ・総務省「地域人材ネット 地方に拠点を置く実践者だからこそできる定住促進戦略」